アウシュビッツの歴史と重症児問題

英国 BBC の今年制作の５回シリーズ「アウシュビッツ」の、延べ４時間弱のドキュメンタリーが放映された。

アウシュビッツがどうして生まれ、どう「死の工場」へ拡充、肥大化していったかを、元囚人、元ナチス兵士、等々の証言や証言に基づく再現 CG、もちろん記録映像等で構成されていた。

アウシュビッツはナチス・ドイツ統治のポーランドの政治犯の収容施設として建設された。つまり、ナチス国家の建設に邪魔な存在の枠を広げ、次第に収容、処理のための「死の工場」へと拡充、肥大化していった。

ナチス国家建設の邪魔者として、初期には政治犯と共に障害児・者も収容、処理の対象に含まれていたとか。

こういう歴史を知るにつけ、「やはりそうだったのか……」と寂しくもあり、悲しくもあり。

重症児の歴史をみれば、戦後の日本の社会でも、邪魔な存在として冷遇されたというより、存在さえ無視されていた。「重症児」という行政的呼称概念は、正にその歴史的事実を含んでいるとも云える。

やはり障害児・者が生きて行ける社会が、究極的にみんなが大事にされる社会の建設ということだと思う。

今の社会の価値判断基準は、お金、地位、成果、学歴、便利、効率、能率等々。これらの価値観の前では重症児の存在が無視されるか、蔑まされる。それ故、重症児の存在そのものに価値を見いだす社会にするには、余程の人々の意識改革が必要となる。

障害児の中でも最も障害が重いといわれる重症児の存在、尊厳をどう守るかという取り組み、大きく云えば文明の新たな価値基準を作り出す源と云っても過言でなかろう。

そう思うからこそ、自分は、重症児問題に今までも、今も拘り続けているし、しかもあれこれ厚かましくも発信している。

重症児の存在は、正にその価値観改革を我々に提示してると思う。重症児問題に係わる

とは、社会の、人々の意識改革に繋がる作業を課せられていると云える。

最も無抵抗な子どもの存在を大事に考える人間、社会、国の意識であれば、いかなる人をも抹殺なんて考えることにはなり得ないと思うからである（甘い考えかなぁ～。でも、人を、人類を信じたい！）

今回の放映をみて、改めて障害児と係り合うことの重要性、重大性を再確認させられた。

（2005 年 8 月 20 日　記）

追伸：

この記事を目にしたメル友から、関連する以下の文献（写）を郵送いただいた。

発信していると、こうして新たな情報・知識も得る喜びもある。

つくづくまずは発信してみるものと思うと同時に、こうした友人、知人に恵まれていることに感謝している。

なお、もし以下の文献をお読みになりたい方は、ご連絡ください。コピーの上、送付します。（コピー代、送料は、ご負担ください。）

河島幸夫：　論説　ナチ《安楽死命令》とベーテルの抵抗、
東北大学法学会、法学、第５５巻　第６号、９２６－９５９、１９９２.

（2005 年 9 月 2 日　記）